
Fr. シュレーゲル「諸流派－論文」における「流派」概念の積極的解釈

橋本悠介（京都大学）

本発表の目的は、Fr. シュレーゲル(1772-1829)の最初の論稿「ギリシア文芸の諸流派について」(1794、以下「諸流派－論文」と略記)における「流派(Schule)」概念を分析することで、この論稿のうちにシュレーゲルの歴史哲学構想を看取することにある。1794年から1796年夏までドレスデンに滞在したシュレーゲルは古代ギリシア文学の研究に専心し、その成果を精力的に発表している。こうした研究を通じて、シュレーゲルは古代ギリシア文学ひいてはその歴史を成り立たせている美と芸術の本質の解明を目論んでいる。「諸流派－論文」はこうしたプログラムの第一歩として位置づけられる。

Schlegel Handbuch (2017) の「諸流派－論文」の項での S. Matuschek の解説が代表的だが、この論稿は基本的にヴィンケルマンの『古代美術史』(1764/1776)との関連のもとで論じられてきた。とりわけ強調されるのは、ヴィンケルマンの美術史構想との類似性である。シュレーゲルが古代ギリシア文芸を「流派」に基づき四つの段階を経る循環的行程として規定しようとしている点に、ヴィンケルマンからの影響が指摘されてきた。この点から「諸流派－論文」における「流派」概念は、『古代美術史』におけるヴィンケルマンの「様式(Stil)」概念を文芸という領域に転用したものと見なされる。一般的に、「流派」概念への言及はその概念内容ではなく、ヴィンケルマンからの影響関係についての議論に焦点が絞られてきた。

だが、「流派」概念をヴィンケルマンからの影響関係に限定し、単なる「様式」概念の転用と判断することに関しては議論の余地が残る。その理由は、第一に「流派」/「様式」という用語法上の違いにある。仮に「流派」概念を「様式」概念を転用したものだと思えば、なぜシュレーゲルはわざわざ「流派」と言い換える必要があったのか。第二に、すでに W. Mettler が *Der junge Friedrich Schlegel und die griechische Literatur* (1955) で指摘しているように、両思想家の歴史体系における位置づけという点で、「流派」概念と「様式」概念には内容上大きな差異がある。シュレーゲルにとって「流派」は「様式の規則的な同種性(eine regelmäßige Gleichartigkeit des Stils)」である点で、「様式」を包摂する概念である。

これらの点を考慮し、本発表ではヴィンケルマンの歴史体系における「様式」概念の位置づけとシュレーゲルの歴史哲学構想における「流派」概念の位置づけの差異を示したうえで、「諸流派－論文」において「流派」が「様式」を包摂する高次の概念として用いられている点を明らかにする。本発表は、「諸流派－論文」における「流派」概念がシュレーゲル自身の歴史哲学構想と結びつく仕方、独自の概念として示され、機能している点を新たに明示することを目指す。